



平安だより 2021年10月号 平安幼稚園

「神様とつながる幸い」牧師・園長 江間紗綾香

『わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。』

(ヨハネによる福音書一五章五節)

アドルフ・ポルトマンというスイスの生物学者がいました。彼は「人間は他の哺乳類より一年、生理的早産である」と言っています。例えば子牛や子馬は、誕生から数時間後には自力で立ち上がり、歩くことができます。そして、自ら母親の乳を探して飲むことができます。それに対し、人間の赤ちゃんは誕生から歩けるようになるまで約一年かかります。また、人間の子供は生まれてからしばらくの間は、多くのことを他人(主に家族)に依存せざるを得ませんし、受け身の生活となります。そこから時間をかけて様々な知識や技術を習得し、一人でできることが増えてくるのです。しかし、いろいろな意味で親の手を離れるのもっと後のことになります。そういう点からも、ポルトマンが「生理的早産である」と言っているのは理解できます。

夏休みが明け、一か月が経ちました。長い休みの間、ご家族と一緒に過ごしてきた子供たち。中にはお家の人やお家から離れることに気持ちの整理がつかない子供もいるようです。休み明けに限らず、時々そうやってしまう子供たちの姿を見るたび、「小さな体と心でいろいろな思いを抱えているんだな」と感じています。そして、親の姿が見えなくなれば自分なりに切り替えてお友達と楽しく過ごしている様子を

見聞きし、ホッとすることもあります。とは言え、お母さんやお父さんの手を離して幼稚園に向かうことは、大人が想像する以上に大仕事なのかもしれません。確かにつながっていた手が離れてしまうのですから。

子供たちが成長すれば、「家」という最も基本となるつながりから、新しい世界(小学校など)へとつながりをどんどん広げていくようになるでしょう。何より最近では、さまざまな手段でいろいろな人とつながりを持つことができるようになりました。そのおかげで世界中の人とつながり、便利になる一方、目に見えないつながりによって傷ついたり、悲しんだりする出来事も増えてきました。いずれにしても、私たちは誰かとつながりを持ちながら自分たちの生活をつくらなければならないのです。

聖書でもイエス様と私たち人間がつながっていることをぶどうの木にたとえて表している箇所があります。それは、イエス様という幹から私たち人間という枝が伸び、豊かな実を結びといることです。何より、私たちは愛や優しさ、平安などたくさんのおおきな栄養を幹であるイエス様からいただき、心豊かに成長させることができます。そのため私たちが結び実は、思いやりや奉仕の心となって他の人へと渡されていきます。そして、この幹は枯れることがないため、枝が途中で朽ちることはありません。ここに確かなつながりがあると云えます。私たちはやがてすべての人とのつながり(手)を離す時がやってきます。その時、寂しさや不安に襲われるかもしれませんが。しかし、そのような時になっても私たちの手を離さないでいてくださるのが神様です。子供たちが成長する中で、目に見えるつながりだけではなく、見えない神様ともつながって、力を与えてくださっていること、いつも守っていてくださっていることを忘れずに、平安のうちに歩んでほしいと願うばかりです。